愛知の博物館

1979年 No.25

愛知県博物館協会

表紙写真　織部手桶形茶入

器高10．2cm

桃山時代　　美濃焼

茶入として伝っているが、本来は組みものの小形の向付であったと考えられ、側面にたっぷりと掛った織部釉と、無雑作な筆による鉄絵の調和が美しい。

愛知県陶磁資料館蔵
（寄贈・故川崎音三氏）

目　　次

東栄町花祭会館を訪ねて
　―芸能継承の博物館への期待―　　広 瀬　鎮 …… 1

荒木集成館の実態と指針　　荒 木　実 …… 4
（昭和53年12月4日開催の愛知・三重
岐阜三県博物館協会交歓研究会提供話題）

欧州博物館みてあるき　　久 住 典 夫 …… 10

施設紹介―　知多市民俗資料館 …… 14
（昭和53年度から協会加盟）

イギリスの記念船を見て　　金 子　功 …… 15

東栄町花祭会館を訪ねて

― 芸能継承の博物館への期待 ―

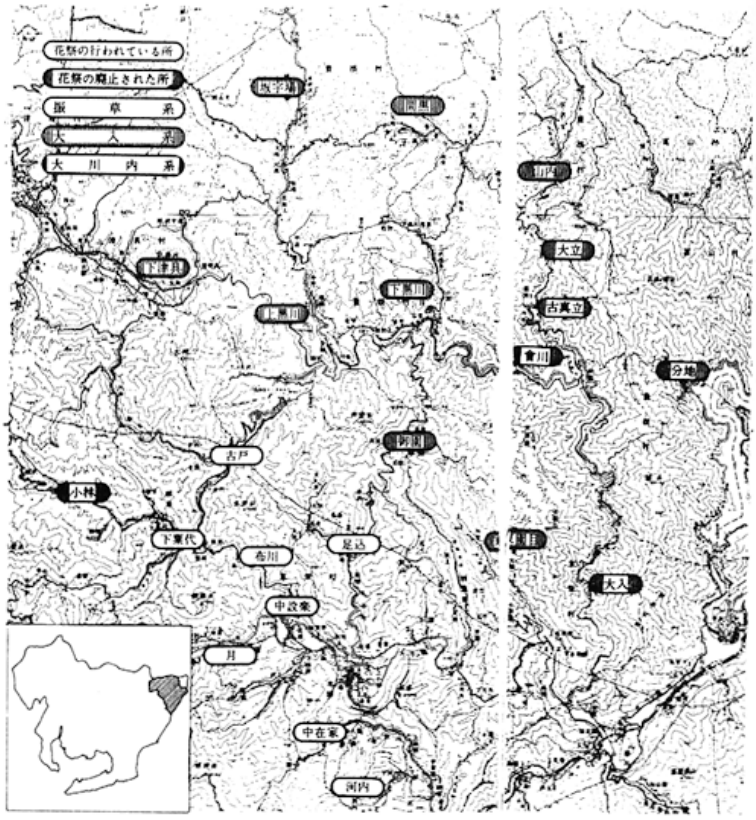
広　瀬　　鎮

1.　北設の文・教の里

今日、愛知県北設楽郡東栄町は、美しい自然と対話する文教の里ともよばれている。とくに、本郷には、総合文化センターが設置されていて、これまでに青年の家、町立博物館（民俗館併設）等が建設され、町の人たちの文化的・知的な要求を満たしてきている。この地区で展開されているユニークな天・地・人・教育をスローガンとした教育文化活動をさらに一段の巾のひろい充実したものに発展させたのが、花祭会館の建設であったといえよう。昭和53年11月２日に開館されたこの東栄町花祭会館は、この地方に古くから伝わる重要無形民俗文化財指定の花まつり保存へ寄せた町民の願いが結実されたものである。

会館の出現によって民俗民芸の保存の問題や、地域の文化財の収集がどのように進められるべきか等、博物館関係者にとっても新しい関心が一段と高まってきた。

昭和54年２月13日御園天文科学センターの金子功氏とこの新装なった花祭り会館を訪ねた。花まつりは、毎年11月下旬から翌年１月上旬にかけて行なわれる。今も昔とかわりなく花まつりが行なわれているのは、東栄町では11部落であるが今日まで30から40種の舞いが伝えられ、演じられてきたことは驚ろきそのものであり、昭和38年９月には無形民俗文化財として認められている。昔からこの地方の人々は、天災・病気・その他一切の悪事はすべて外部の悪霊のなせる業と考え、この悪霊を祓い除けて人々に幸福を与えるものとして花まつりを行なってきた。この芸能の保存をめぐって花祭会館は、建設段階から地域の文化財保存センター、民間民俗芸能の保存と上演、民俗資料の収蔵庫、展示室という諸機能が強く人々の間で求められたといえよう。



花まつり分布図

2. 施設の魅力

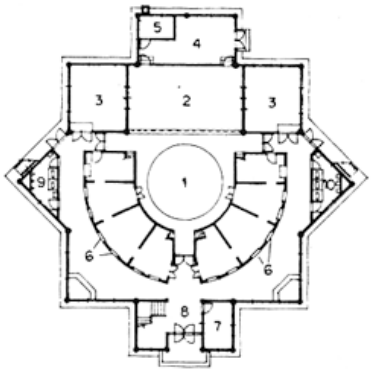
会館は二階建で、一階には、舞庭・神座他写真パネルの展示、管理事務室等があり、とくに中央壁面に沿って劇的な花まつりのカラー写真が展示されており、テープによる解説が聞ける。左手の階段は二階の展示室へ見学者をさそう。（一階から二階への見学者の導線には少々不自由があり残念な気がする。）二階には、ガイド・コーナー、展示室収蔵庫があり、232席の鑑覧席が一部床部を見おろせるように舞台をぐるりととり囲んでいる。この座席に座って、床面廻展台につくられている花まつりをおどるモデル人形を眺めると、村々で行なわれているにぎやかな花まつりの様子がなおさら知りたくなってくる。マルチ・スライドが映され、床が廻転して舞庭の花の舞、湯ばやし、三つ鬼等10体の舞人人形が動く、祭りの囃が流れ、解説がはじまる。そして映画が祭りの姿を紹介してくれる。ますますこの芸能への興味がかき立てられてくる。見上げる天井からは目をみはるような美しい湯蓋（ゆぶた）がつりさげられていた。花祭の実演と多目的に使用出来る舞台装置はこの会館の自慢でもある。

まことに、近代化された上演舞台がつくられこの劇場機能を有する会館は機械操作も一人でできるように調整室が設計されている。新しい型の芸能博物館が将来にむかって活動をはじめたのだという気持を強く感じさせられた。これまでに知られている日本ハイランド郷土資料館（岐阜県）、演劇博物館（東京都）等の演劇を中心とした博物館施設にみられないすこぶる現代的な鑑賞方式が採用されていることを喜こぶ反面、村々の花まつりが、年中いつも上演され人々をこの民間芸能の世界にひきづりこんでこれないものかと思わざるをえない。残念なことに現在、年間を通じての祭り芸能の上演プログラムがまだ予定されていないとのことであった。

花祭会館平面図

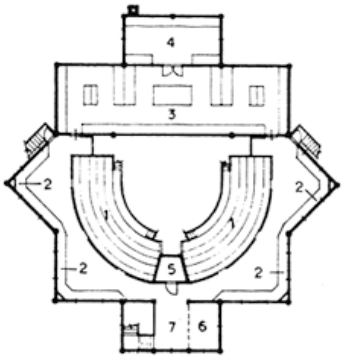
凡例

	1F
1	舞庭
2	神座
3	控室
4	機械室
5	ボイラー室
6	写真展示コーナー
7	管理室
8	ロビー
9	男便所
10	女便所



凡例

	2F
1	鑑覧席
2	展示コーナー
3	展示室
4	収蔵庫
5	調整室
6	ガイドコーナー
7	ロビー



3. 「雰囲気」は文化財

休日にもかかわらず、会館の平賀勝郎氏は、館内をすみずみまで御案内下さった。花まつりのシーズンであれば、村々でおこなわれる祭りを見物にやってくる見学者たちのためにこの会館は、特色あるビジターセンターの役割りを果たしてくれるに違いない。金子功氏によれば、昔から“三つの「むい」の舞い”ともいわれてきたこの祭りは、「ねむい」、「さむい」、「けむい」という祭りをとりまく特異な雰囲気のなかで行なわれ、人々は悪口雑言を云いかわしながら、楽しみ、舞いおどる。要するに見る方も舞う方もエネルギーを爆発しあったものであった。村々の祭りも、年とともに変化しているといわれる。それだけにこうした芸能そのものの公開はむづかしい、とくに定期的に上演することはむづかしいことだと平賀氏はなげいておられた。こうした村人たちの心を燃えたたせた祭りの雰囲気は、残念ながらこの会館の中だけではとうてい味わうことは出来ない。だが、芸能が保存され町ぐるみで考えられ、関連した民俗資料が大切に保存され一堂に公開されたことはまことに意義深いことといえよう。

二階の座席周辺には、文献、図書、面の写真、“ざぜち”とよばれる花まつり時の舞戸と神座の四方のシメナワにつるす紙の切形等が展示されている。何といっても、この会館の目玉は大入(おおにう)部落で花山家に残されていた祭り関係の民俗資料である。花まつり衣裳、舞小道具、面形、祭具類が、所せましとケース中に展示されている。四つ舞にかかわる藍染めの衣裳も昔のものは地味であるが、新しいものは派手になってきている。鬼の舞の面はまことに迫力のあるもので、一緒に展示されている田楽の面や町内から寄せられた貴重な資料等などは、古い民俗芸能文化の素晴らしさを満喫させてくれる。見学者としては、農民信仰の生きた姿、豊穣、無病息災を祈る行事であり、農民レクリエーションといわれる生きた芸能が常時、芸能の再現がみられないことは、やはり、何といっても残念である。花まつりの本当の魅力は、祭りに参加した者でなければわからないのかも知れない。心をはずませ、身体にまでリズムを伝えてくれると云われる花まつりは、いわば総合芸能であって、一つ一つの祭礼用具などをばらばらに切り離して展示するだけではとうてい見学者に満足を与ええない。芸術の保存、芸能の継承、展示と調査研究等多くの活動が要請され、同時に地域に働らきかける博物館活動がとくに望まれているのではなかろうか。「祭りは雰囲気である。」 金子氏は、寒い肌をさす夜のタイマツの煙りにいぶり出されておどるそのどよめきに想いを寄せる。生きた民芸・民俗館として、花祭会館が町民にとっての楽しみの場、芸能継承と保存の場としてますますの利用がなされることがたえず望まれている。そのためにも、多くの人たちと花まつりをむすびつけてくれる学芸員や学芸職員といった博物館活動をすすめる専門家がもっともっと居て欲しいと思うのは、私一人ではあるまい。

花まつりのざぜち

オニ面

4. 期待される社会教育活動

花祭会館刊行の資料目録によると面型17、衣裳49、祭具46、古文書28、御園尾林家古文書等７、古文書コピー23、文献・単行本等があげられており、これ等は民俗学的研究者にとって興味ある資料である。そして又、民俗・歴史・芸能等の研究のためグループなどでこの会館を尋ねる人たちにとっても、この会館は、奥三河の民俗研究上なくてはならない施設となって行くにちがいない。将来ガイド・コーナーが充実されて、学芸員、社会教育主事などの働らきで山村民俗や、花まつり芸能にかかわるきめこまかい紹介や指導が、見学者のためになされることになれば一層この館の存在価値が高まって行くだろう。早くもこの立派な施設をもった東栄の人たちが本当にうらやましく思えてならないのである。

この魅力にあふれる花祭会館へは、東三河の玄関豊橋で飯田線に乗りかえ１時間で東栄駅につく。ここで下車してバスで15分ほどで本郷につく。会館へは歩いて10分である。青年が都会へ出向き、舞人もさびれ、花まつりがすたれてきたと人々にも感じられた昭和51年のこと、花まつりは国の重要無形民俗文化財に指定された。その時、北設楽まつり保存会長・東栄町長原田嘉美氏は花まつりは「村の大パーティである」と述べている。今後花まつり会館は多くの人々にこの地方の民俗文化の心あたたまる心のもてなしを、そして人々にとって文化の創造の喜こびをもたらしてくれることであろう。

東栄町花祭会館　　住　所：愛知県北設楽郡東栄町大字本郷字大森１番地
休　館：月曜・祭日の翌日、12月28日～１月１日
入館料：展 示 見 学　100円　（大人・小人共）
スライド映画　300円　（　〃　）
団体割引きあり

＜日本モンキーセンター　学芸部長＞

荒木集成館の実態と指針

荒　木　実

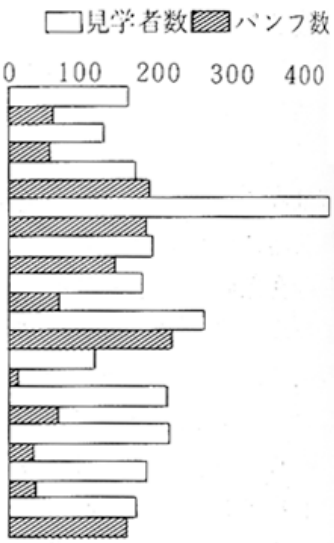
A　統計上で云えること

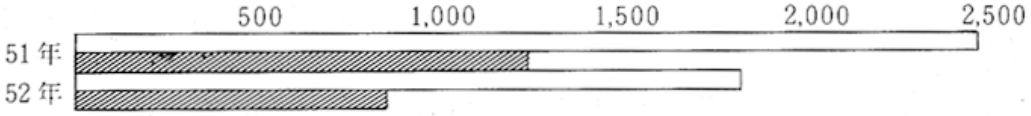
見学者数は博物館にとっては生命である。46年はもの珍らしいと云う感じで多かったが、47年からは平常の姿に戻り、それから見学者数は安定してきているが、47年からのパンフレットの売上げは段々と段階的に上昇してきている。表にして分かってきたことである。その理由として考えられることは、

1. バックナンバーが多くなってきて、売る量が多くなってきている。
2. 団体の見学者、即ち社会教育の利用が少しずつふえている。
3. 展示者とその人にまつわる見学者の拡大。
4. 見学者も展示変えの２か月毎に見にくる常連が増してきている。
5. 総合的に見て、歳月と云うか、自然のなり行き。

昭和５１年　荒木集成館の統計

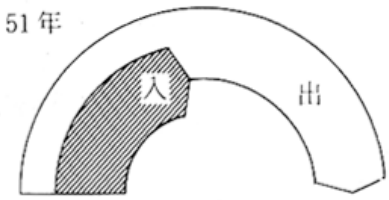
月	題　　名	日　数	見学者数	パンフ売上数
1	渡辺文平鉱物化石展	8	164	57
2	〃	9	134	51
3	名古屋考古学会展	8	171	190
4	〃	8	447	184
5	名古屋地学会展	10	195	143
6	〃	8	177	65
7	宮島　照考古展	10	264	220
8	〃	9	111	17
9	野田正一蝶蛾生態展	8	211	59
10	〃	10	217	37
11	鶴田彦四郎魚・魚骨展	9	185	39
12	〃	9	169	155
	計	106	2,445	1,217





パンフレットの出費と回収費

全体として出費と収入

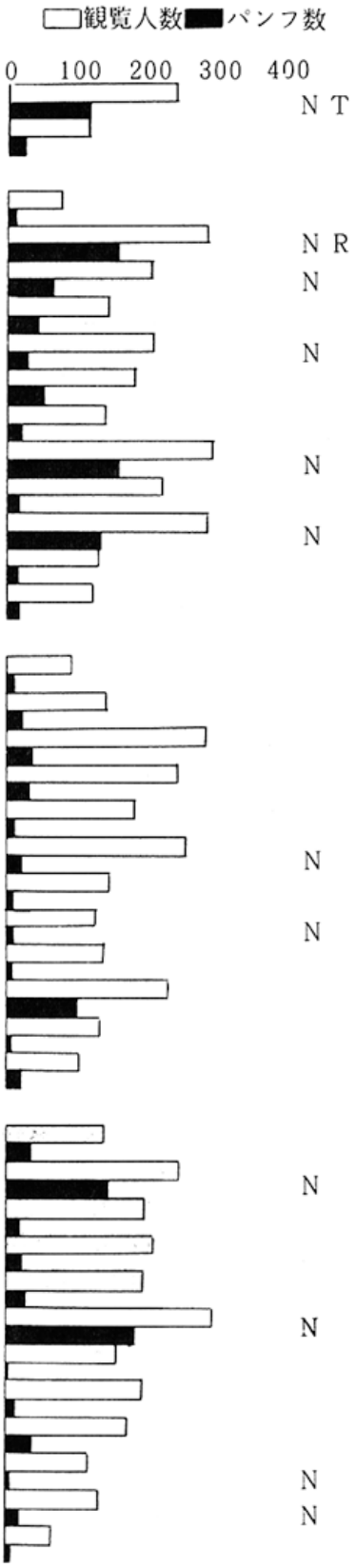


昭和５２年　荒木集成館の統計

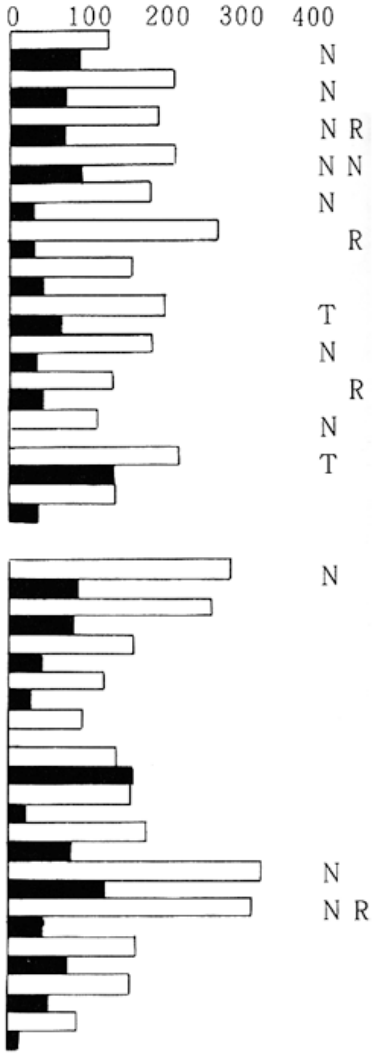
1	山田弥貴岩石鉱物展	9	145	64
2	〃	9	124	34
3	鈴村秋一考古展	8	141	25
4	〃	8	139	119
4	東山地学会展	3	102	
5	馬場　豊化石鉱物展	8	158	34
6	〃	9	163	15
7	奥村一夫石器展	10	201	173
8	〃	8	120	24
9	坪井邦夫考古遺品展	9	173	146
10	〃	11	148	158
11	須賀瑛文名古屋クモ展	8	84	25
12	〃	8	101	17
	計	108	1,799	834

荒木集成館・5か年の経過図表

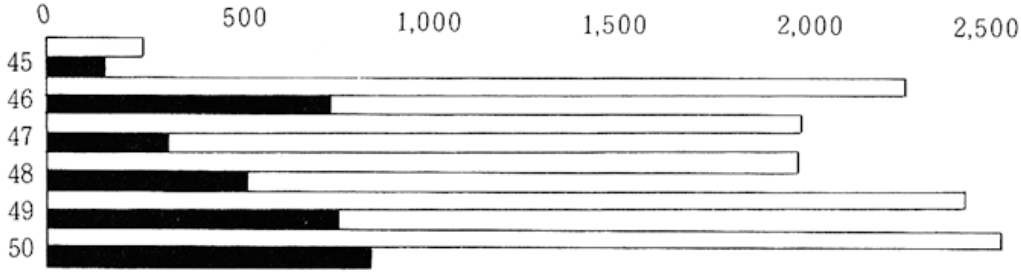
年	月	題名	開館日数	観覧人数	パンフ売上数	
45	11	開館記念展	11	244	118	N T
	12	〃	8	114	25	
		計	19	358	143	
46	1	〃	9	81	10	
	2	藤　正彦化石展	8	284	161	N R
	3	〃	8	207	64	N
	4	丹羽主税遺品展	8	145	49	
	5	〃	10	209	31	N
	6	吉田富夫考古展	8	182	53	
	7	〃	9	142	26	
	8	琉球諸島生物展	11	291	160	N
	9	〃	9	220	21	
	10	成田　陽カタツムリ展	10	287	138	N
	11	〃	8	132	14	
	12	三渡俊一郎考古展	8	124	20	
		計	106	2,304	747	
47	1	〃	8	91	8	
	2	熊崎憲次鉱物展	8	144	26	
	3	〃	8	228	42	
	4	内山邦夫考古展	10	245	33	
	5	〃	8	184	14	
	6	福原　稔シダ展	8	254	26	N
	7	〃	10	149	11	
	8	柚木和夫地歴展	8	127	14	N
	9	〃	8	141	9	
	10	天野一義海藻展	10	236	104	
	11	〃	8	132	5	
	12	蓑虫山人考古展	8	105	25	
		計	102	2,036	317	
48	1	〃	8	140	39	
	2	トリオ化石展	8	249	149	N
	3	〃	8	199	18	
	4	長谷川寅二石器展	10	210	26	
	5	〃	8	199	29	
	6	小林喜康水草展	10	293	186	N
	7	〃	9	160	2	
	8	北川　武昆虫展	8	195	13	
	9	田中　稔考古展	10	175	39	
	10	〃	10	118	5	N
	11	荒木　実鉱物展	8	138	19	N
	12	〃	8	63	8	
		計	105	2,139	533	



年	月	題　　名	開館日数	観覧人数	パンフ売上数	
49	1	和田英雄考古展	9	136	97	N
	2	〃	10	222	76	N
	3	井波一雄植物誌展	10	202	73	N R
	4	〃	8	224	99	N N
	5	中山　清貝類展	8	192	28	N
	6	〃	10	280	32	R
	7	見晴台遺跡展	8	163	45	
	8	〃	9	209	69	T
	9	湯浅四郎陶磁展	10	197	38	N
	10	〃	7	146	45	R
	11	名古屋地学会展	3	122		N
	11	北村斌夫考古展	9	237	145	T
	12	〃	9	144	36	
		計	110	2,474	783	
50	1	古生代の化石展	10	299	94	N
	2	〃	8	276	87	
	3	集成館収蔵品展	10	165	48	
	4	〃	8	131	34	
	5	東山地学会展	3	100		
	5	三菱水石芸術展	7	145	170	
	6	〃	9	167	23	
	7	見晴台第12次展	8	188	82	
	8	〃	11	340	132	N
	9	名古屋市シダ展	9	328	48	N R
	10	〃	8	175	80	
	11	加賀宣勝石器展	10	165	54	
	12	〃	8	97	18	
		計	109	2,576	870	



N新聞，Tテレビ，Rラジオ



〔S.51.1.10 荒木実記〕

B　名古屋考古学会との結びつき

名考会は吉田富夫氏（名古屋市文化財調査委員）を会長として昭和38年に発足し、始めは南区の見晴台遺跡の発掘を中心にやっていたが、名古屋市が重要な遺跡に注目して民間団体より取上げてしまい、市の直属にしてしまった。名考会は三渡俊一郎氏（現会長）が事務長になってからは、会報を発行することに重点を置くように変って行った。その頃、即ち昭和45年荒木集成館は開館しました。勿論私は名考会の発足の時からの会員であったから考古学の展示会は自然科学と一回おき毎になっているが、その内会員の展示をあげてみると、

№4吉田富夫、№7三渡俊一郎、№11柚木和夫、№15長谷川寅二、№20和田英雄、№25北村斌夫
№31加賀宣勝、№33名考会展、№35宮島　照

と考古学の半分位即ち全体としては4分の1位であるが、名考会の展示に示める割合は大きい、自然に名考会の人々も集成館へ来る回数も多くなってきて私も段々と会の仕事の責任を感づるようになってきた。昭和50年からは私が会計になり、52年からは会計事務局を集成館が受持つことになってきた。行事も以前は時折やってはいたが、51年からは当館と名考会が主催になって展示期間中に一日、全員に通知して説明会を開くようになった。そしてパンフレットも会が全員に購入配布してくれる事を約束して下され、集成館としては大きな支えとなってきた。勿論、こうした会員の面倒を見る重要な通信係は私が全てサービスするわけである。会報の発行は経済的に年1回となったが、当館との結びつきにより展示会と見学会の行事が多くなってきた。学術的なものは本だけで、学術的より会員全体の姿も大衆的へと移行してきて、気楽な趣味的な人々が入会して来ている。即ち博物館が中心になってきた関係か、社会教育の方向へと大きく全体が自然に流されてきている。

C　その他の会について

自然科学の展示については、私は中学の理科の教員として25年勤務していたが、5年目位から研究に志、ビカリヤ会と云うグループに入った。会には入ってなくても研究している人はおのずと心が通ってくる、そうした人。又一方私が地学会に入っていて知り合った人等と今迄の展示者をまとめてみると、

ビカリヤ会員9名、名古屋地学会員3名、その他の人7名

と云う数が出て来た。その他の中に化石趣味の会が2回やっておられるが、この展示者の中に個人でなく、それぞれの趣味の会を率いておられる人と、そうした会に入っておられる人が沢山みえた。私にとっては出発点はビカリヤ会と云う小さな教員の研究グループが軸であったが、社会には学問を求めている社会人が沢山いることが分かってきた。ちなみに展示者の研究グループをあげてみると、

東海化石趣味の会、日本貝類学会支部、東海シダの会、井波植物研究会

その他教員のグループ、会社のクラブ、同窓会のグループ等であった。名考会のように説明会の折に動員力のあった集団は4つであった。これはやはり常々に社会教育グループを作っているからだと云うことも分かってきた。名考会も今日の状態になれたのも、これらのお手本があったればこそである。

D　博物館にとって社教集団の重要性

1. 学校内のクラブ活動と社教の趣味クラブの違いについて、学校内においては中・高校は3年、大学は4年と云う年数の打切りがあること。社教クラブは年数に限りがない、興味のある事は死亡する迄出来る。私の若い時から入っている郷土文化会は昭和の始め頃からあり現在も続い

ている。我々の名考会も古きをたずねれば昭和12～3年頃から存在し、その頃活躍していた吉田富夫氏が38年に再興したと考えられる。

2. 社教の中心となる人物は、先づ知識が必要である為に教員とか有識者と云う所がのぞましい、そして大勢の人数を指導すると云う事も大切であるが、一定人数をとりまとめて世話してくれると云う事が最も大切である。即ち上向きでなく下向きに仕事ができる人物である事、裏返えせば学芸員の態度とも云えるのではないでしょうか。

3. 荒木集成館においては、社教団体の名考会、化石趣味の会と云った様な団体に属する人が展示会をした時の見学者数は誠に大きい、更にその集団の人々が共同展示した時は、もっと見学者は大きい、云うなれば社教集団は自分等が展示出来る博物館を求めている。美術で云うギャラリーに相当する所が自然科学・社会科学は博物館になる。今迄の博物館と云うものは、そうした民衆と云うか社教集団と云うものを知らなかったのではないか、或はそうした事を知っていても認める意志を持たなかったのではないでしょうか。

私は今迄の展示会の経過において荒木集成館収蔵品展が一番淋しかったと思っている。云うなれば現在の古い形の博物館がやっている収蔵品の倉変えと云う奴である。何故なら自分一人であったから、大勢の人々が展示に参画してこそ、それを見せる側にも見る側にも大きな動きが興るのだと感じた。こうした経験から得たものは、博物館の民衆化と将来性を方向づけているのではないでしょうか。

E　荒木集成館の進路

以上6か年の経験をふまえて私のやれる範囲内で、“山椒は小粒でぴりりと辛い”荒木集成館の進路指針をまとめてみよう。

a・経済政策として

1. 入場料は、これからは冷暖房を入れなければいけないから経費としても取らねばならない。
2. 教室等の使用料を戴く、それだけ社教グループに愛されなくてはいけない。
3. 売店コーナーを造り、本、集成館独特なお土産を作り販売する“絵はがき”“ミニチュアーの土器”など。
4. パンフレットは反経済性であるが学術文献として大切なものであるから部数は少くこのまま続行して行こう。勿論今迄通り販売して行く。

どうあろうとも人一人の人件費を念出できなくては存続することの不可能を心得べし。

b・施設について

1. 展示室は2つ、1つは荒木集成館の考古学コレクションを展示する室、今1つは個人研究、社教グループ研究等を展示でき常に交代して行く室。
2. 事務室、売店、休憩室等は人件費の関係上一眼で以上が見える構造。
3. 多目的な教室、研究集会、講習会、視聴覚室、或は展示室、会食会等、その他諸々に使用できるよう。今一つ余裕があれば畳の室を応接室に、小人数の会合に、それでいて大勢入れる。
4. 収蔵庫、これは博物館の重要点であるから、できるだけ広く。

さてこれらの物を収容して、しかも経費を考えて50坪（165㎡）までにおさめなくてはならない。

'77. 1. 12

＜荒木集成館　館長＞

欧州博物館みてあるき

久　住　典　夫

私は昨年11月25日より16日間、日本博物館協会主催による「欧州博物館事情視察団」の一員として参加する機会を得ました。ローマ・フィレンツェ・パリー・ロンドンなどの16の博物館施設を見学しました。なにぶん充分な準備もなく、短期間の駆けあるきで意をつくすことは出来ませんでしたが、印象に残った館について紹介してみたいと思います。

1.　ローマ

(1)　ヴァチカン博物館　MUSSEI　VATICANI

カトリック総本山サン・ピエトロ寺院の一郭にある博物館で、いくつかの絵画館・美術館・宮殿の居間・礼拝堂などと、それを結ぶ回廊からなっています。ここはキリスト教の古い伝統と芸術、歴代ローマ法皇の努力によって、膨大な資料が収集・保存され、その一部が展示されています。

ヴァチカン博物館

ここを公式訪問し、ペルスガールッ・ワルテル総務部長から、現在ヴァチカン博物館がかかえている問題について説明をうけました。ヴァチカン博物館は、カトリックの本山として世界各地から年間数百万人の来館者があり、その対応に苦慮しているとのこと。とりわけ古い既設の建物を活用して資料を展示していることから、改良を加えることがたやすく出来ない構造であることをあげていました。それに、動線が延10㎞近くにも及ぶため、来館者の要望（参観時間とか何を見たいとか…）に応じ、A・B・C・Dの４つのコースを設け、各通路や展示室に案内コースを展示してあります。

また不慮の事故を防止する対策として、ＴＶカメラによる動態の監視を行い、各室ごとに対応出来る放送テープをあらかじめ用意しておいて、放送によって誘導・指示するようにしています。また防犯のため、露出展示物については赤外線や磁気装置によって、手をふれたり持ったりすると、ブザーが鳴るといった盗難防止を計っております。

総務部長がどちらかといえば管理の責任者のためか、学芸面についての説明は少なく、館の管理運営についての話に終始して時間をとり（午前10～12時）、いざ見学となったとき、ここの閉館は午後１時と聞きびっくりしました。今さらながらイタリアのお国がらというか、参加者全員顔を見合わせました。１時間で全館を見ることは至難のことで、長い回廊を駆け足で通り抜け、ヴァチカン博物館の白眉であるといわれるシスティナ礼拝堂へ急ぎました。ミケランジェロのすばらしい天井画を収めるこの礼拝堂は、ローマ法皇の公式礼拝堂であるとともに、建物そのものが美術館であり、絵画史上の大傑作といえるものです。

(2)　ローマ国立博物館　MUSEO　NATIONALE　ROMANO

映画「終着駅」で有名なローマのテルミニ駅前の広場に面し、古代ローマの浴場跡に建てられ

た博物館で、別名テルメ（浴場）博物館ともいわれています。

ローマでの最後の日、同室の鳥取県博の山名氏と二人でホテルからナッイオナーレ通を真直ぐ共和国広場に向かって歩いて行きました。しかしどこが博物館の入口かわかりません。地図を改めて見なおし、それらしき入口を捜してはいったのが、ろう人形で造られた世界の有名人が並べてあって、聞くとそれは右隣とか。概してイタリアの博物館は日本とはちがい、案内などサービス面にはいたって無頓着な気がします。よく見ると古代遺跡の壁面に館名のプレートがあるばかりで、浴場跡に石棺とか大理石の彫刻が無造作に並べてあります。その奥に錆びたスチールのドアがあり、監視員数人が雑談にふけっているさまはのんびりしたものです。

しかし、ここは古代ローマ彫刻の展示では第一級といわれるだけあって、中身はすばらしいーの一語につきます。小中学校の音楽の教科書の表紙によく使われている「ルドヴィレの玉座」（ヴィーナスの誕生）の前に立ったとき、写真で見ていたとは異なり、感動を覚えました。この館は１・２階それぞれローマ時代の彫刻や浴室のモザイクタイルが展示されており、収集品の豊富さには目をみはりますが、資料の解説も、館のガイドブックも何もありません。物があるから見ていきなさいといった、きわめて大味の展示といったところといえましょう。

2. フィレンツェ

(1) ウフイッチ美術館　GALLERIA DEGLI UFFIZI

イタリア・ルネサンス揺籃の地であるフィレンツェは、街中が美街館といわれるだけあって、中世の街が現代に生きているといった景観をみせています。その中でフィレンツェの名家メディチ家が建てたウフィッチ宮の三階が、そのまま美術館として公開されています。

宮殿の長い廊下には、ルネサンス期の彫刻やタピストリがぎっしり並べてあり、第１室から28室までイタリア・ルネサンスの絵画が展示してあります。なかでも最も有名なものとして、ボッティチェルリの「春」と「ヴィーナスの誕生」、レオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」などがあります。しかし、ここもかつての宮殿を活用しているため、暖房などは各室の入口に電気ヒーターがすえつけられ、監視員がのんびりとあたっている姿がみられました。また窓ぎわに掛けてある絵画に、朝の太陽が直接あたっていても、誰も気にとめる様子もありません。これもお国がらというものかと考えさせられました。

(2) アカデミア美術館　GALLERIA DELL´ ACCADEMIA

街の一角、道路に面したうすぎたない高等学校に隣接する普通の建物で、捜すのに一苦労しました。しかしここはミケランジェロの「ダビテ」の原作があることで有名。この美術館は彼の作品がまとめて収められており、「ダビテ」の像は、館の中央に堂々と配置されています。図録などで見るとちがい、想像以上に大きく、青年ダビテの力にみちた姿といえましょう。なお、ダビテ像は、フィレンツェのシニョリーア広場と、丘の上のミケランジェロ広場にそのコピーがあります。この館には、未完の「パレストリーナのピエタ」その他力強い彫刻がどっかと並べられており、見る者を堪能させてくれます。

3. パリー

(1) ロダン美術館　MUSEE DE RODIN

コンコルド広場を南にセーヌ河を渡るとブルボン宮（下院議事堂）につきあたり、外務省の塀を左折するとやがてアンバリッドの塔が見えてきます。ロダン美術館は、アンバリッドと道をへ

だてた東側にあります。

名古屋市博物館がロダン作「考える人」をホールに展示していることもあって、別件を依頼されていた関係からたずねてみました。あいにく12月３日は日曜日で、正職員はお休みとのこと、英語の話せる人は売店の黒人少年だけで、翌日再度出かけてみました。

翌４日月曜日、サン・ローラン館長は出張中で、中年の美しい女性学芸員の方と片言の英語で用件をすまし、彼女の案内で館内を見学しました。

「青銅時代」「接吻」「神の手」などロダンの傑作が１・２階にずらり展示されており、この間に彼の習作やデッサンが陳列されています。窓からみえる庭は手入がゆきとどいていて、「地獄門」や「カレーの市民」「考える人」の像がすえられ、その背景にアンバリッドの円蓋が美しく印象的でした。周囲の環境こそちがえ、長野県穂高にある禄山美術館のことが、無意識に思い浮かんできました。

ロダン美術館の庭
（パリー）

(2) 国立民俗民芸博物館　MUSEE NATIONAL DES ARTS ET TRADITIONS POPULAIRES

パリー西郊のブーローニュの森の中に、1960年開設された、フランスで唯一の民俗・民芸・人類学の博物館を公式訪問しました。ここは今まで見てきたローマやフィレンツェの施設と異なり、最新の施設・設備をもった建物で、広報部長のギーエ氏から説明を聞くことができました。

当館は1928年来フランス各地にあったこの種の機関を統合したもので、コルシカ島ほか二ケ所に分館があり、170名の職員が当たっているとのこと。活動の理念として、民族の伝統をたどること、産業革命以降の生産されたもの、作られたものの美しさを対象に収集・調査研究がすすめられ、それに基づいて展示されています。展示室は常設が二つで、１階に一般向、地下に部門別分野があり、他に特別展用のコーナーと、三つの柱からなっています。例えばアルプス山麓の山小屋の内部が展示され、資料はそこにあるがままの状態で並べられています。最初は暗くしてあり、ボタンを押すと解説の音声が流れ出し、その説明対象にスポットが当てられ、やがて全体が明るくなるといった装置がほどこされている仕組となっています。また、古い民族音楽の楽器の展示コーナーでは、その前にイヤホンが置いてあり、耳に当ててボタンを押すと、その楽器を使ったメロディーが聞こえてくる仕組など、進んだ展示方法をとっています。

ここで特に注目させられたものに、出版活動があげられます。研究スタッフが大学などの研究機関と提携して、研究成果をシリーズを追って出版しております。一版が２～3000部で大体３ケ月から半年位で売り切れるとのことです。別に専門書も年１～３冊出版しています。例として、古い建物を対象に、地方別時代別に、農家について調査・研究したものや、用途別に食器に関した研究物など、普及活動として見るべきものと考えさせられました。

4. ロンドン

(1) 大英博物館　THE BRITISH MUSEUM

予定が変更されて科学博物館が公式訪問となったので、そちらは欠席して終日大英博物館の見学に出かけました。ここはかつての大英帝国の威力によって集められた優品の豊庫であって、と

うてい短時間で見終わることはできません。とりわけ古代エジプト・ギリシヤ・ローマに関する資料は、その質といい量といい他に比べられないものがあります。最近13の展示室はすっかり改造され、展示品の数が減らされ、新しい展示の工夫が加えられて見やすくなったといわれています。

館にはいって最初に気付いたことは、多くの人が折りたたみ腰掛を争うようにして借りている光景です。後でわかったことですが、１日11時と２時の２回、学芸員の列品解説を聞くためのものなのです。エジプト室のロゼッター・ストンの前に２～30人の来館者が、先の腰掛に腰を降ろして熱心に説明を聞いているところに出合わせました。順次見学していくうち、他の室でもこのような光景を見ましたが、このシステムはずいぶん前から来館の間に定着しているものと考えられます。

ロゼッターストン（大英博物館）前での列品解説

それにロンドンに来て改めて気付いたことですが、テートギャラリーでもアルバート美術館でもナショナルギャラリーでもすべて、インホメーションのコーナーが広く活気に満ちていることです。大英博物館では本館入口に二ケ所のコーナーがあり、広いスペースの売店も隣接して設置されています。売店では図録・絵ハガキ・スライドから関連図書、さらに作品をアレンジした装飾品やレプリカ等多種多様の品を販売しております。この広いコーナーに集まる人々の姿を見ていると、別の意味でわが国の博物館と比べ、お国がらとはいえ、広い意味の普及活動として参考とすべきものがあるように感じてきました。

(2) ロンドン博物館

以前はハイド・パークの北西の隅にあったロンドン博物館は、２年前セントポール寺院の東、キャノン通の一角に新設され今日に至っています。ここはロンドン市内で唯一の古代ローマの遺構を館内に取り入れ、超近代的な建物として開館したとのことでした。

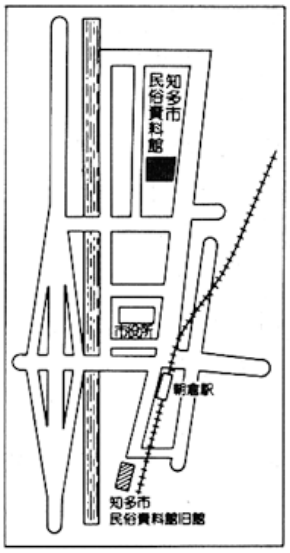
道路からいきなり円塔階段を登り、長い通路をへて中空に建つすばらしい建物。ここではロンドンの原始・古代から現代に至るまでを、ジオラマや模型・複製品によってわかりやすく展示されています。古代ローマ時代の城壁の遺跡を、上からのぞけるよう３階からガラスごしに見学出来る仕組や、ロンドンの街がかつて再三の大火にあい、その都度整備拡張されてきた状態を、市街地の模型の上に光（火事）と音声によって知らせる工夫など、斬新な展示方法をとっています。

それにロンドンのどの博物館・美術館でも見た光景ですが、ここでも教師の説明を熱心にメモをとりながら聞き入っている児童・生徒の姿に接することです。20人位がひとかたまりになったり、中には通路に円形に座り、先生の話を聞く組など、あちこちで目にしました。よく聞いてみると、学校教育の中で、学習内容の15％相当は「地域の学習」を取り入れることが規定されていること、そのために、教師の引率のもとに博物館などに来て学習するのであることがわかりました。

<名古屋市博物館　学芸課長>

―施設紹介―

知多市民俗資料館



知多半島は古くから開けてきた土地です。この知多市にも約6000年前の縄文早期の二股貝塚から、約1600年前の弥生後期の大廻間遺跡まで数多くの遺跡があり、大昔から住みやすい土地であったことを示しています。中世には窯場も数多く造られ、かめ、山茶碗、山皿などが焼かれていました。丘陵地と海とにはさまれた狭い土地でしたが、農業、漁業は発展してきました。

しかし、昭和37年から名古屋南部臨海工業地帯造成のため浅海漁業が埋めたてられることになり、昭和38年には漁業組合の解散をよぎなくされ、漁業補償を受けた漁民は転職せざるをえなくなりました。

このため漁船、船具類など漁業に関するものが不要になり、また漁業補償を受けたりして、家の建替が行われ、漁撈具の保管ができなくなったものが失われたりしました。

昭和38年愛知県教育委員会の伊勢湾・三河湾の緊急調査があり、新知が調査地点になり民俗資料に深い関心が寄せられました。

知多町文化財保護委員の人たちの間で民俗資料の収集保管が計画され、各方面の協力を得て多数の民俗資料を収集することができました。ちょうどこの時解散した漁業組合の建物が町へ寄贈され、民俗資料館として昭和43年11月に開館しました。

資料館には重要有形民俗文化財として指定を受けた1,073点に及ぶ知多半島の漁撈用具と、県の有形民俗文化財の指定を受けた知多木綿に関する資料333点、その他農機具、一般生活道具、古文書、考古資料、指定外の漁撈用具、木綿関係資料など多数の資料が収蔵されています。

これらのことを素地にして、昭和53年10月6日新展示棟がオープンしました。

新展示棟は鉄筋コンクリート一部二階建てで、A棟は知多市の紹介、B棟は一階が国指定の漁撈用具と、打瀬船の実物展示、県指定の知多木綿に関する資料と問屋資料を展示しています。B棟二階は、国指定の漁撈用具と養殖海苔に関する資料が展示してあります。

A棟の知多市の紹介では、かつて知多市の人のほとんどが農業を行っており、水には大変苦労をしていました。そこで溜池と知多というテーマで水に関する資料、池の立杁・水のない桶・水替え桶・畑つるべ桶・足踏水車・溜池の分布模型を展示してあります。次に農業の中で特に稲作に関する資料を順を追って、鍬・鋤・苗かご・がんづめ・田起し・千刃こき・唐箕・万石など、手で使用する資料を展示し、藁製品を作る道具として、ぞうりを作るためのいんが、こも編み、むしろ編み機を展示しています。また米作りだけではとても一年食べるだけの収入がなかったので、副業として江戸時代から黒鍬かせぎ、鍬鍛治などの出稼ぎがあり、大正に入ると養蚕が収入として大きな位置をしめていました。副業に関しては、黒鍬・鍛治道具・養蚕資料を展示しています。

生活に関する資料として、木と台所道具のテーマで、台所で使用された、桶・おひつ・塗の重箱・割子弁当箱・膳の類など木製品を展示。知多市の文化財では、県無形民俗文化財の指定を受けた門付万歳と梯子獅子をとりあげて展示してあります。またここでは、ビデオテープを使用した知多の四季・知多万歳・梯子獅子が見れます。

考古資料室には縄文から室町時代までの資料が各時代ごとに地図を利用して、位置が分かるように展示されています。

B棟に入るとまず目に入るのが、打瀬船の実物展示、これは愛知型と呼ばれ伊勢湾・三河湾でかつて活躍した船で、帆をはり、船を風上から風下に向って横に流して網を引き漁をした船です。二の棟には船に関する資料・船大工道具・船衣装・船上道具・生活道具・櫓・かい・大漁旗などが展示してあります。

少し奥まった場所に知多木綿のコーナーが設けられ、問屋資料・機織・染・晒に関する資料を展示しています。ここの特徴として、機織の工程を順を追って展示していることと、綿の栽培をやり、織の技術を保存していることです。

二階には漁撈用具が使用目的別に展示してあります。網を使って、自分が海に入って、釣るための道具・しかけてとる道具・売買用具・活し道具などのテーマで、打瀬網・鳥貝まんが・貝まんが・たこつり・たこつぼ・がにつり・釣針・ぎじ針、売買道具は、ぼてふり用の道具・かごの類、活し道具では、大たんぽ・活しかごなどを展示してあります。

またここには江戸時代のいわしの油をしぼる道具も展示してあります。

知多の昭和20年代から30年代にかけて現金収入の大きな位置をしめていたのが養殖海苔でした。養殖海苔のコーナーでは、海苔の糸状体の栽培研究に使用した資料・捨い海苔の道具・養殖海苔の道具・採った海苔を製品にするための道具を展示し、三つの模型を使って海苔を採り、製品にするまでの様子が分かるようになっています。

新しい展示棟はだいたい以上のように展示してあります。現在はまだいろいろ細かい説明が付いておりませんが、だんだん作り上げていく予定です。

漁業や木綿に関する研究をなさっている方にとっては、良い研究資料が提供できるようさらに資料をそろえたいと思っております。

館の活動として、各種の講演会、子供教室などの講習会を開き、木綿関係では、染と織の技術保存をするために教室を設ける予定です。年に数回の特別展を企画しています。第一回として「ひなまつり展」を2月6日から3月4日まで江戸から昭和まで各時代のひな人形を展示。
研究資料の作成、資料収集と資料作りをめざしています。

場　　所　知多市緑町12の2
電　　話　0562－33－1571　（代表）
交通機関　名鉄常滑線朝倉駅下車徒歩12分
休 館 日　月曜日・祝日（祝日が月曜日の場合は火曜日も）
　　年末・年始（12月28日から1月4日まで）
入館時間　午前9時半から午後4時まで
入 場 料　無　料

イギリスの記念船を見て

金　子　　功

日本にも古くは三笠、新らしいところで宗谷等歴史的意義のある船を記念船として保存してい

るが。往時七つの海を支配したイギリスは、さすがに海洋王国を誇る国だけの事があり、これ等の記念船が非常に多い。

今回の研修旅行を機会にこれ等の船を許される限り訪ねて見たいと思ったが、何分にもイギリスの滞在日数の少ないこともあって限られた数しか見ることが出来なかったが、そのうちいくつかを紹介しよう。

これ等の船はH・M・Sと名を冠して呼ばれているがH・M・Sと云われている意味はHer Majesty's Ship's の略で帝国軍艦等と云う意味もあるが、ここでは名誉ある記念船とでも云う意味であろう。

◎H・M・S・Discovery （ディスカバリー号）

此の船は有名な探険家Robert Falcon Scott（スコット）が南極探険に使用した小さい帆船で、ロンドン市内のテームズ河畔に浮んでいる。

此の船を訪ねるには地下鉄CIRCLE LINE 又はDISTRICT LINEのいずれかに乗ってTEMPLE 駅で下車すると右手の方に小さい帆船が目に入る。これがDiscovery 号である。

全長50*m*位の小さい帆船でよくも南極まで出掛けて行ったものだと感心させられる。

私の聞いた所では此の船は第一回（1930年）に南緯82°17′まで到着した時に使用したもので全長50*m*、排水量1620 ton の小船であるが、彼は第二回（1910年）にはTerra Nova 号で再び南極点に向い1912年1月17日極地に達したときには先人アムンゼンのノールウェー国旗が建っていたと云う。引返す途中で吹雪のために凍死すると云う悲劇の探険家の乗船である。

タラップを渡って船内に入る。数年前訪ねたときの記念撮影の写真を渡そうと探して見たら見付からない。尋ねて見たら死んだと云う、息子に渡すよう頼んで船内を見学する。

内部は数年前と変りが無く10部屋ある士官室には、入口に、CAPT SCOTTだとか、SKELTONだとかCHACKLETON 等聞いた事のある探険家の名前が掲げられていて、丁度見学に来ている小学生たちが声を上げて読んでいる。彼等の名前は小学生の間にも有名であろう。此の小学生の団体には係が小さいテープレコーダーを肩に掛けていてこれから流れる説明を補足しながら案内をしていた。

各部屋には探険隊員の装備等が展示してあり子供達の興味を集めていた。数年前と異っていた所は、後部船室の一部を改造して最近の南極観測のジオラマ等も作られており、展示の近代化に努力している姿が見られる、係の人が日本に帰ったら観測船宗谷とふじの写真を送ってくれるよう頼まれた。

此の船は入場料は無料で小さい売店では絵バッヂ、Scott の伝記の本等を売っている。

Discvery号の少し下流には同じH・M・Sと呼ばれているWellington、Chrysanthemum、やPresident と云う三隻の船があるが、此等は公開されていないようだし、上流にはOldcaledonia、Hispaniola、Tattershallcasttle等の古い蒸気客船があるようだが今回は時間が無くて見られなかった。

尚Discovery 号の近くには第一次大戦（25隻）第二次大戦（90隻）で失われた潜水艦115隻の乗員の記念碑が立っていたり、海にゆかりのこれ等を見て歩くと半日は充分かかる。

◎CITTY の標柱

船とは関係が無いが、この近くには有名なシティーの入口の標柱が立っている。TEMPLE 駅の左手に赤と白の馬のデザインの標柱が道の両側に立っている。

ロンドンには行政上のいわゆるロンドン市の他にシティーと称する名誉と権威のある一画のあることを知ってる人も多いと思う。この一画に入るには女王と云えども下車して通ると云われる

シティーの人口を示す標柱の一つが此所にあるので見ておくのもよいだろう。

◎H・M・S・Belfast　(ベルファースト号)

Discovery のもう少し下流、ハネ上げ橋で有名な Tower　Bridge　の少し上に一隻の近代的な軍艦が浮んでいる。丁度ロンドン塔の向い側である。近代的と云っても1993年の建造であるから、新らしいものでは無いが、第二次大戦中に輸送船団の護送や、数次に亘る海戦に輝かしい戦果を挙げた巡洋艦 Belfast　号である。

公開されてはいるが、2ポンド（約500円）の見学料を払って入って見ると前部砲塔の内部が見れるだけで、到る所に立入禁止の札が立っていて、ほとんど見る所は無い。

此の船を訪ねるには Discovery と同じく地下鉄 CIRCLE　LINE 又は DISTRICT　LINE で TOWER HILL 下車 Tower　Bridge　を渡って右手 200 *m* 位の所にある。

◎H・M・S・Victory　(ビクトリー号)

ロンドンを遠く離れた南海岸に PORTSMOUTH がある、軍港として有名で、第二次大戦の際ノルマンディ上陸作戦の司令部のあった所で、此所にもいくつかのH・M・Sがある。

Victory 号、Nelson 号、Vernon 号等が海軍基地内各所にあるが Victory 号以外は一般公開されていない。

PORTSMOUTH はロンドン市内 WATERLOO 駅から約1時間半（料金 4.3 ポンド 1,700円）位で行くことが出来る。市内中心部に PORTSMOUTH　and　SOUTHSEA と云う大きい駅があるが、軍港に行くには HARBOUR　STATION まで行った方が近い。

メインゲイトを入ると正面に大きい帆船が見えて来るが、これが Nelson の乗艦でトラファルガーの海戦で有名な Victory 号である。

1759年起工、1765年進水そして1778年引渡しまで19年の年月をかけて建造された船だけに豪華な船で、船尾から見ると、四階建のビルのように見える。3500 ton 、100 *m* 近い全長を持った全木造帆船が丁度乾ドックに入ったような形で船体全部が見ることが出来るように据えつけてある。

入場料40ペンス（約160円）で船内に入るとセーラー服姿の青年が案内してくれる。

三層の大砲甲板に入ると上部から12ポンド砲、24ポンド砲、36ポンド砲と下に下るにつれて大きい大砲が据付けてある所などは発射の際のショックを受ける場合を考えての事であろう。片側約50門の大砲が一斉射撃のときは壮観だろうと思われる。

船内各所に Nelson の使用した吊床や、事務机、そして此所で彼が戦死したと云う所には写真が飾ってある、案内の青年は楽しく説明して最後に火薬樽から大砲に火薬をつめる方法まで話してくれる。

木造帆船の屋外保存だけに、良く見ると手入が大変で、外装板だけで無く、内部の柱も所々新らしい材料の所があり上甲板では、何人かの大工が修理作業中で、まるで日本の木造家屋の保存のような手数がかかっている。

船を出た所には Victory 博物館がありトラファルガー海戦の説明用ジオラマがあったり、小さいけれど子供達には楽しいらしく見学の小学生で賑わっていた。

他の建物には広い売店もあってガイドブックや写真、記念品や帆船のモデルを作る人のための設計図まで売っている。特にガイドブックは大人用、子供用、各種揃っていた。

此の町には海に関連したものとしては他に海軍博物館（ROYAL　MARINES　MUSEUM）が少し離れた海軍の施設の中にあり赤と黒を基調とした美しい展示がされていて興味があるが又機会があったら紹介したい。

話は変るが、クリスマスキャロルや二都物語で有名なチャールズ・ディケンズの生家が此の町

にあり Dickens Museum となっているので時間があればロンドン市内の Dickens House と共に見ておくのも良いだろう。

◎H・M・S・Catty Sark （カティーサーク号）

ロンドン市内からテームズ河を下ると天文台で有名なグリニッヂの街に出る、テームズ河の畔の此の街は川に沿って海軍大学、海軍博物館があり河岸段丘の上線のスロープの中に有名な天文台の跡があり此の附近一帯をグリニッヂパークと呼んで居る。

グリニッヂに行くには汽車でCANNON STREET 駅から約30分で行ける（旅行案内書等にはCHARING CROSS駅から等と書いてあるが此の方が本数が少ないので前記の駅又はWATERL-OO 東駅からの方が本数が多い）又はバス 158番なら川岸に近い海軍大学正面の Catty Sark に近い所、153番なら段丘の一番上天文台に近い公園正面まで行けるし、夏季は市中心部から船も出ていてこれを利用するも良いだろう。いずれも30〜40ペンス（約150円位）の料金である。

川に近い所、テームズ河の人道トンネルのエレベーター乗務の所に全長では前述 Victory 号位の長さであるが巾は大部狭い三本マストのスマートな船が遠くからでも目につく。
これがウイスキーの名前等でも有名になった Catty Sark 号である。

此の船は1869年に当時の価格で16150ポンドで建造され、はじめ中国航路、次いでオーストラリア航路に就航し、1871年には中国一英本国間を107日で走ったと云う、当時の快速帆船で、一名チャイナークリッパーと云われるものの一隻である。

帆船時代が去ってからはしばらく英海軍の練習帆船となった時代もあったが、1953年にカティーサーク協会のものとなり1957年から一般公開されている。

鉄骨木造帆船であり、近代的な感覚の船で人気のまととなっているようだ、40ペンス（約150円）の見学料を払って入った船内は特別な展示も無くあくまで帆船それ自体を見せるのが目的であるが、下部甲板にある古い帆船の船飾（Figure heads）つまり帆船の船首についている人形形の飾りのコレクションは見事で全部で50以上あろうか、帆船華かなりし時代の名残である。

Victory 号同様屋外保存のため常時4名の大工が補修作業をしており、このときも上甲板の厚さ5㎝もある板の張り替え作業中であった。

此の船の近くにはSir Francis Chichester が夫妻で1966〜67にかけて世界一周をした小型ヨットGipsy Moth 号も保存されている。

GREENWICHには他に前に述べた海洋博物館（National Marines Museum）や経度0度で有名な天文台が今他に移転して海洋博物館の一部として天文博物館があるし、街を歩くと船舶部品のアンチックの店があったり楽しい街である。

以上簡単にH・M・Sを紹介したが、此の数年の間にイギリスの博物館の展示の近代化の努力は大変なものがあり、新らしい形の博物館への変身振は驚ろきであった。

＜東栄町御園天文科学センター　所長＞

『愛知の博物館　No.25』

発行日　昭和54年3月
発行者　愛知県博物館協会
名古屋市東区東桜一丁目12番1号
愛知県文化会館内（TEL＜052＞971－5511）
編集者　愛知県博物館協会事務局
印刷所　ニホン美術印刷株式会社